まいあーと■油彩「白い街」by 川島清子

たちかわの石仏たち③

堂上墓地の『地蔵菩薩』

砂川五番と六番の境あたり、五日市街道からちょっと南に入ると流泉寺の共同墓地があります。この墓地は江戸時代初め、砂川の新田開発が始まった頃からのものだそうで、当時の地名に基づき「堂上墓地」と呼ばれています。このお地蔵様もその頃に建立されました。砂川には自分の家の敷地内に墓を建てる「内墓」が多かったのですが、近年は流泉寺やこの共同墓地などに改葬されています。その際、内墓の墓石や石仏をこのお地蔵様の足元に置き、改めて先祖の冥福をお祈りしたそうです。開発当初から砂川村の歴史を見てこられたこのお地蔵様は、今もその美しい御顔で街の移り変わりを見守ってくださっています。

立川柳田國男を読む会　檜山泰子さん・談

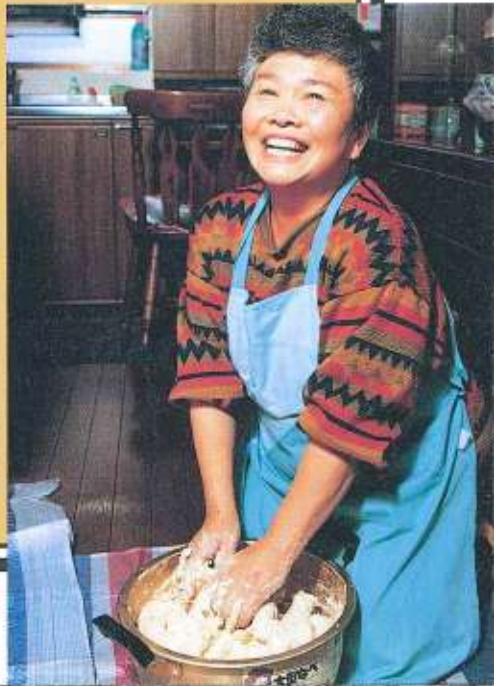
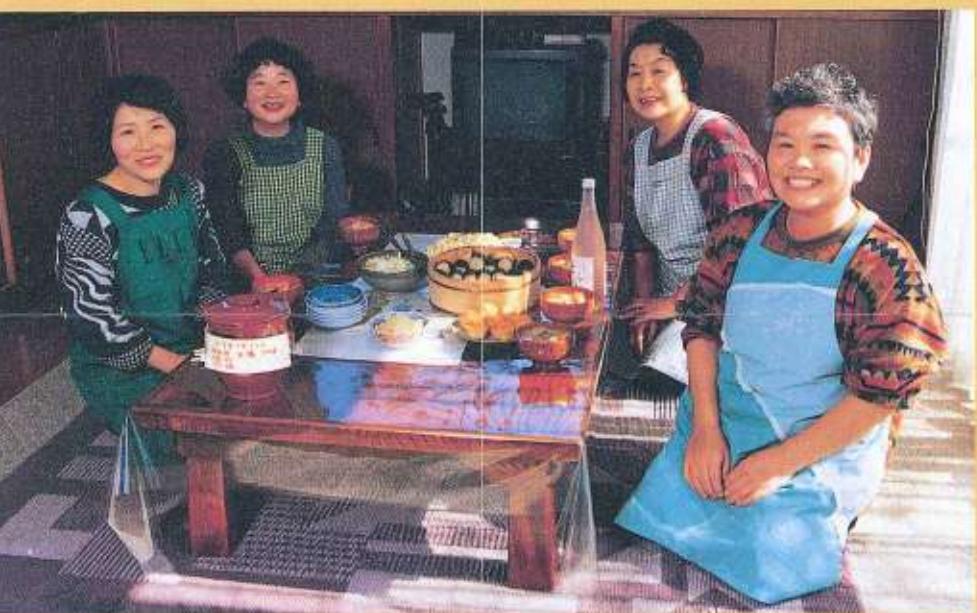
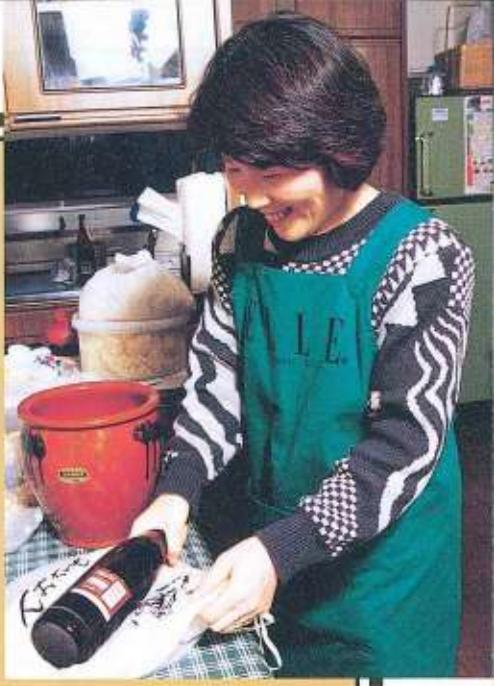
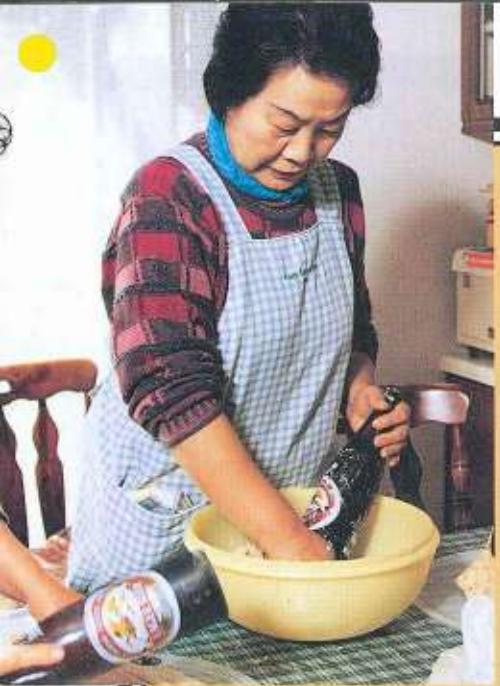
●所在地：柏町2-37
●建立：享保17年（1732年）

鈴木励子さん（富士見町４丁目）

梶原春海さん（富士見町５丁目）

◎ えくてびあんレポート ◎

味噌は自分でつくるもの

小町アキ子さん（富士見町５丁目）

味噌は買うものではなくつくるもの、と五十嵐タカネさん（富士見町5丁目）宅に集ったご婦人方。
毎年こうして集まって味噌を「自家製」にしている。
ほどよく煮上げた大豆を粉々につぶし、塩麹と混ぜあわせる。
さらに粘りが出るまでこねた後、容器に移し変えて仕上げに塩をふる。
あとはじっくりねかせて、食卓にあがるのはちょうど来年の今頃。
過程はシンプルだが、混ぜたりこねたりの重労働。買ってきたほうが早いのでは、という疑問も浮かんだが、
昨年仕込んだ味噌の御汁を戴いたら、そんな思いはブッとんだ。
「この辺りじゃ、昔はこうして自分んちでつくってたのヨ」。
汗をかきかき大豆をつぶしている４人のお母さん。古き良き“立川の母”とは、こんな姿だったのだろうか。

五十嵐タカネさん（富士見町５丁目）

えくてびあんの輪

人がいて、街があります。
あなたがいて、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん！
リストのお店にはいつでも、えくてびあん！

かつての私は、ボランティアなどに全く興味のない人間だったんです。

城戸節子さん

国際ソロプチミスト立川会長

本誌２月号のこの対談において、ゲストの橋本ライヤさんは「ボランティアという発想が根づいてきたのは、物心ともに"豊か"になった証拠」と語っていた。その言葉を裏づける好例のようなグループがここに存在する。

ソロプチミスト。1921年にアメリカで発足、世界各国にネットワークを広げる女性奉仕団体である。日本では昭和35年から活動がスタート。ここ立川でも、昭和59年「国際ソロプチミスト立川」が発足、現在36名の女性が活動中である。活動の本旨が理解してもらえればと、対談場所にあらわれたのは、会長を務める城戸節子さん（柴崎町２丁目）。はたしてソロプチミストとは、志ある「あしながおばさん」たちの集団であった。

立井 今日は城戸さんが会長を務めておられる「ソロプチミスト」について、いろいろお伺いしたいと思ってるんですが、そもそもこの「ソロプチミスト」って何語なんですか。

城戸 これはね、造語なんですよ。ラテン語で姉妹を意味する「ソロ」、そして最善という意味の「オプチティマ」。この二つの言葉を併せて造られた言葉なんです。

立井 「姉妹」と「最善」ですか。

城戸 ええ。「女性にとっての最善なるもの」という意味が込められてるんですね。

立井 これはグループの名称と考えてよろしいんですか。

城戸 そうですね、「私はソロプチミストです」という言い方もできるんですが、奉仕団体の名称と思っていただいて結構です。もともとは一九二一年にカリフォルニア州のオークランドという町で、職業を持って活躍している女性が結成したのが発端なんです。その時の女性の数は、五十人だったそうです。

立井 たった五十人で始めたグループが、七十年の時を経て、いまや国際的な組織となってるわけですか。

城戸 職業を持つ女性の奉仕団体としては世界最大です。日本では一九六〇年から「東京クラブ」という名称で始まってるんですが、その東京クラブが親クラブとなって、立川は八四年から「国際ソロプチミスト立川」として活動が始まりました。

立井 そうすると今年で十四年目になるわけですね。今、メンバーは何人いらっしゃるんですか。

城戸 立川は三十六名です。

立井 立川の人口十五万人。うち、半分が女性だとして七万五千人。それで三十六人という数字は、割合から見て少ないと思ってしまうんですが。

城戸 新しい方に門を閉ざしているとか、秘密めいたことをしている（笑）とか、そんなことは決してないんですが。ただ、ソロプチミストには条件が二つ必要なんですね。

立井 と、言いますと？

城戸 先ほどもお話ししたように、まず職業を持っていなければいけないんです。女性で管理職の立場にある方、あるいは専門職をされている方であるということ。もうひとつは、現在の会員の方二名の推薦が必要だということ。この二つが入会の条件なんです。

立井 ちょっと疑問なんですが、いわゆる「奉仕」を目的とする団体に「条件」があるというのが不思議だと思うんですが。

城戸 そうですね。奉仕するということに、条件も何も関係ありませんよね（笑）。でも私が思うに、奉仕を目的とする団体だからこそしっかりしなければいけない部分もあるんじゃないかと。ボランティアは「利潤」とは無縁であるべきですし。

立井 ああ、なるほど。あまり節操なく人を集めると、損得勘定で入ってくる不貞な輩がいないとも限らない（笑）。

城戸 もちろん人それぞれ、いろいろな考え方があるのは当然ですが。ただ、やはりソロプチミストとしては、ある部分で志を同じくしていないと。

立井 なるほど、よく分かりました。ところで具体的にはどんな活動をされているんですか。

城戸 今取り組んでいるのは、大きく分けて二つのことですね。まず「環境問題」について…。あの、ちょっとお待ちください。今日お見せしようと思って持ってきたんです…（鞄から何か袋状のものを取り出す）。

立井 はあ、何ですかこれは…。あ、手さげ袋？

城戸 そう（笑）。会員はみんな持ってるんです。これ、パラシュートの生地で出来てて丈夫なんですよ。

立井 ソロプチミストのマークも入ってますね（笑）。

城戸 スーパーなどで買い物をすると、お店で袋や包装紙を用意してくれるでしょう。それをもらわずに、こっちに入れてくださいって（笑）。ゴミ問題を考えていて、私たちにできることはないだろうかって、数年前に作ったんです。最初はお店の人に怪訝な顔をされて（笑）。

立井 最近はどうですか。

城戸 それが、ありがとうございますって、お礼を言われるんです（笑）。私たちのやってることは小さいことですけれど、自分たちなりに実践していこうと。特に私たち主婦は不勉強なので、学習することから始めるんです。専門の講師の方をお招きして、環境に関する様々な問題を学んでいます。今年は「ダイオキシン」について、これまでは「フロンガス」や「原子力問題」等を勉強してきました。

立井 そういう勉強会をもとに、具体的な行動を考えていくわけですね。

城戸 まだまだ不勉強で、中々難しいんですが、女性は「生活者」としての目線がありますから、暮らしに密着したところで何かできないかなと思っています。

立井 買い物袋なんて、男の発想にはないですからね。それと、もうひとつの活動というのは？

城戸 「青少年の育成」ということがあります。具体的に今行っているのは、立川女子高校（高松町）の茶道部の生徒さんたちと一緒に、ボランティア活動を行っているんです。

立井 ソロプチミストと女子高生。わかるようなわからないような、面白い取り合わせですね（笑）。

城戸 たまたま私たちのメンバーのひとりが、彼女たちに茶道を指導しているというご縁があったものですから。若いうちからボランティア精神を養ってもらうということで四年前から交流しています。去年、企画の主導を彼女たちにとらせて、「バッカリ市」に出店したんです。私たちはフォローにまわって。収益の使い道まで全部任せたんです。

立井 ほう、女の子たちに!?

城戸 ええ。丁度その頃、テレビでモンゴルのストリートチルドレンを扱った番組が放送されたんですが、彼女たちはそれを見て「モンゴルの子供たちに寄付をしたい」と言い出したんです。それでその案をもとに、今年の一月に、モンゴルからソロンゴさんという少女歌手をお招きして、チャリティーコンサートを行ったんです。彼女は立川で行われている「世界こども音楽祭」のグランプリ受賞者で、私たちのメンバーとご縁があったものですから、喜んで協力してくれました。

立井 いいですね、若い人たちと一緒に何かを行うというのは。

城戸 あと、ソロプチミストとして継続している活動に「奨学金制度」というのもあります。

立井 学生さんに資金援助をしているわけですか。

城戸 はい。至誠学園（錦町）の卒園者で、進学を希望している子供たちに勉学費用を支援しているんです。東南アジアからの留学生なども含めて、これまでに述べ三十人の進学に協力しました。

立井 あの、また意地悪な質問かも知れないんですが、先程「ソロプチミストは利潤を求めない」と言われてましたよね。そうすると、その奨学制度の資金はどこから生まれるんでしょうか。会員の方の寄付ですか。

城戸 いえ、違うんです。この奨学金については、私たちが企画したチャリティーショーや講演会などの収益を充ててるんです。会の運営資金としての会費は集めますが、それ以外に徴収はしません。だから奨学金は、自分たちで考えて企画し、行った事で収益を上げなければならないんです。著名な方をお呼びしたとしても、なんとか安い出演料で交渉したり、会場もできるだけ安価に抑えたりと、方々駆けずり回って（笑）。

立井 そうだったんですか。いや実は今日お話しするまで、ソロプチミストというのは、例えば「ロータリークラブ」だとか「ライオンズクラブ」の女性版だという印象があったんですよ。

城戸 ああ、なるほど（笑）。似てる部分もあるかも知れませんね。

立井 ああいったクラブには、会員であることにある種のステータスが生じるでしょう。同じように、ソロプチミストという団体も、ステータスの部分に力があるんじゃないかと思ってたんです。でも話を伺っていたら、伝統はあるにしても実に地道に、生活の目線から取り組まれている。独特な存在感のある団体だなと感じたんですが。

城戸 ステータスを意識するなんてことはまずありません。私個人の話をすれば、かつての私はまったくボランティアなどに興味を持たない人間だったんです。それが年を重ねるにつれて、他人に気持を配る余裕が出てきた。何か役に立つことがしたいと思っていた時に、ソロプチミストの仲間に出会うことができたんですね。一人では何も分からなかったり、臆してしまって出来ないことでも、仲間がいればやれるんじゃないか、と。ステータス云々よりも、仲間と一緒に何かを行う、その喜びの方が私にとっては重要なんですね。

立井 たとえば、そのお仲間たちと、ご主人も交えて家族ぐるみでお付き合いするなんてことはあるんですか。

城戸 どうでしょう。女は女で勝手にやってなさいって感じでしょうか（笑）。もしかしたら「コワいオバサンたちだから近寄らない方がいい」なんて言っているのかもしれませんね（笑）。

東風

わが立川に「ソロプチミスト」という団体があることは、うすうす知ってはいた。伏見裕子さんが会長をされていた時にいくらかの情報は入ってきているはずであったが、核心に触れることのないままに過ぎていた。今月号の対談で城戸節子さんがつぶさに語ってくださったように、ソロプチミストは伝統に支えられた「国際的」な団体である。そのことを知らずによくぞ今日まで編集者ヅラしてきたものだ◆ソロプチミストに限らず、ボランティア活動に意欲満点のグループは多い。現代人のキーワードは「ボランティア」であるといってもよい程だ。ある時、立川地域文化財団が市民の中から善行者を表彰しようとした時に、ボランティアは即、その人の生き方なのだから表彰するしないの範疇には入らないのではないかとの問い掛けがあった。答えはすぐには出ないが重い提起である◆唐突だが「ボランティア体質」というものがあるのではないだろうか。日常がそのままボランティアになっている。友人の一人は仕事の都合で新潟の長岡に住んでいるが、先日風のたよりに心筋梗塞で緊急入院したという。早速に見舞いの電報を打ったが、数日にして病院からの返事には、幸いにして回復に向かっているという。その文面から早くも彼は同室の人々の世話をあれこれと看ているらしい。ボランティア活動のウォーミングアップというところであろうか◆春日傘　たたむ小さき　えくてびあん

（表紙）油彩「白い街」川島清子
（編集）池田隆男　小林康史　隅川理　名尾居真　山田恵子
（写真）伊沢巧　中村伸　五来幸平

月刊えくてびあん　第165号
平成十年四月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市曙町2-17-5
杉田ビル6F　〒190-0012
電話　〇四二(528)〇〇八二
FAX　〇四二(528)〇〇六五
編集発行人　立井啓介
印刷所　㈱大廣社

連載 四字熟語（十）

春風得意

中国において、科挙の試験に合格、その得意満面なさまを云っている。唐の猛郊が科挙に合格して作った詩の一節という。

転じて、官位、職務が順調に昇進することに用いる。

現代で云えば、第一志望の大学に合格した時の若人の気分に似ていようか。「サクラサク」の祝電に酔った人も多いのではないだろうか。類語に「走馬看花」がある。

私の立川原風景　第九回

豊泉恵三（柏町）

◆ 格納庫のある風景 ◆

私は明治三十八年、砂川村に生まれたから少年時代には飛行場はなく、畠の中を通って西の踏切り近くの本屋へ歩いて行ったものである。飛行場が出来るとこれに沿って砂川へ通じる道があって、格納庫が近くに見える。これに戸袋が突き出て穴があり、丹沢大山等の遠い連山が格納庫によってプッツリ切れないのが面白くて画に描いたものである。エトルタ風景が多くの画家によって描かれたのは後で知ったが同じ気持ちだったと思う。

（画家）